

基盤教育機構FD「ワイガヤ研修」実施報告

清 水 栄 子

Report of Faculty Development “Waigaya” FD Program in the Institute of Liberal Arts

Eiko SHIMIZU

【キーワード】 ファカルティ・デベロップメント、振り返り、インタビュー

1. はじめに

基盤教育機構では、機構会議終了後に「ワイガヤ研修」と称するFDを2018年7月から継続して実施している。本稿は、初回から2019年12月までの2年間実施してきたFDの実施報告である。

最初に「ワイガヤ研修」という名称決定の経緯について述べておきたい。というのも、筆者は着任後の第2回ワイガヤ研修から参加することになったが、本機構の目指すFDについて、この経緯を知ることによって、より理解することができたからである¹。ワイガヤとは、「立場の相違にかかわらず同じ組織に属する者たちが気軽に『ワイワイガヤガヤ』と話し合うこと。本田技研工業株式会社が提唱した言葉で、仕事・プライベートのどちらでもない職場での多人数による会話のことを指す」と説明されている²。本機構が目指すFDは、この言葉が意味する通り、立場の相違に関わらず機構内に所属する教員が、報告者が提供する教育、学びの話題や課題について、ワイワイガヤガヤと話し合うことで教育改善について考え、行動していくところにある。

1 2018年度のワイガヤ研修は、FD委員である池田輝政教授(当時)が主導され、実施記録の作成も担当されている。

2 朝日新聞社、知恵蔵 mini <https://kotobank.jp/word/ワイガヤ-1705304> (参照 2019/12/26)。

2. ワイガヤ研修の実施記録とその特徴

2018 年度は、主として報告者の担当する授業に関する実践報告が行われた。2019 年度については、授業実践の報告に留まっていない。初回は、ゲストスピーカーを招いて総持寺キャンパスの設計意図や什器の選定理由等について説明いただいたうえで、WIL Studio の活用方法について議論を行った。2 回目以降については、事前アンケートを実施し、報告内容も含め発表者を募った³。その結果をもとに、梅村修基盤教育機構長と相談のうえ、発表スケジュールを計画し、実施してきた。過去 2 年間の実施記録は表 1 に記している。各報告の概要については、『基盤教育論集第 6 号』および本稿末に掲載しているので参照いただきたい。

次に、ワイガヤ研修の特徴として以下の 3 点を挙げる。1 点目は実施形態である。講師が主導するいわゆる集合研修ではなく、報告者により選定された授業等に関する話題提供と参加者による質疑応答で構成されている。2 点目は、選定された報告が他の発表者と同一科目となる場合がある点である。同一科目に関する報告であっても、報告者の問題意識、授業実践の手法、アプローチなどの観点が異なっているため、報告内容は同一とはならない。3 点目は、時間設定が 1 時間未満になっている点である。会議終了後の実施であり、参加者の疲労度や負担等も考慮し企画している。

表 1 ワイガヤ研修実施記録

	回	月日	報告者	発表内容(授業名等)
2018 年度	1	2018 年 7 月 19 日	池田 輝政	「現代の子どもと教育」レポート採点
	2	2018 年 9 月 28 日	東田 充司	「現代の子どもと教育」双方向授業
	3	2018 年 10 月 25 日	武田 裕紀	「科学技術史」授業の目標・方法・成績判定の考え方
	4	2018 年 11 月 15 日	梅村 修	「日本語表現」実践報告「ディスコースマーカー」
	5	2018 年 12 月 6 日	水藤 龍彦	「日本語表現」実践報告「自己を極める」
	6	2019 年 2 月 28 日	李 慶 国	「中国文化演習」「中国語現地演習」実践報告
2019 年度	1	2019 年 6 月 19 日	三上 哲也 [※]	総持寺キャンパス WIL Studio の有効的活用
	2	2019 年 7 月 18 日	松家 裕子	中国語教育のカリキュラム、海外研修
	3	2019 年 10 月 22 日	大串 恵太	Question Formula Technique, High Tech High の事例
	4	2019 年 11 月 14 日	田上 正範 Thornton Katherine	WIL Studio (総持寺キャンパス) の活用 春学期の振り返りと今後
	5	2019 年 12 月 19 日	伊藤 文男	キャリア開発センター業務、インターンシップ

※話題提供者として学外から三上哲也氏(三菱地所第 4 設計部)をお迎えした。

3 2019 年度のワイガヤ研修の企画・運営は、FD 委員である Thornton Katherine 准教授とともに行った。

3. 報告者へのインタビュー

ワイガヤ研修の成果と課題を明らかにするために、報告者 11 名のうち 9 名に、インタビューを行った。質問項目として、

- (1) 報告は、自身の授業の振り返りになったか
- (2) 質疑応答が自身の振り返りにつながったか
- (3) 他者の報告が自身の授業等へのヒントとなっているか

を提示し、聞き取りを行った。各項目に関して、聞き取り内容を以下にまとめる。

(1) ワイガヤ研修での報告に際して、ほぼ全員が授業等についての振り返りを行っていることが確認できた。報告の準備段階で自身の授業について振り返り、どの観点から発表を行うかを決定している。具体的には、「普段の授業中に意識し、実践していること」、「報告の中で他の教員に知ってもらいたい現状」、「授業実践のアプローチ」といった点についてである。

(2) 発表後の質疑応答については、報告を聞いた他の教員からの質問や確認事項、コメントへのやり取りから、自身の授業に関する確認やヒントが得られたようだ。具体的には、「授業への応用可能性の確認」、「カリキュラム改訂へのヒントが得られた」、「課題に対するヒントが得られた」、「元気をもらえた」という回答であった。

(3) 他の教員の報告を聞いて、学生や他の教員について知り、自身の状況について振り返ることができたという。具体的には、「自身が知らなかった初年次学生の動向を知ることができた」、「他の教員のこだわり、教育ポリシーについて知ることができた」、「自身の立ち位置を確認できた」といった回答である。他の教員が実施しているグループワークなどの授業形態にヒントを得て、自身の授業で実施したという回答も見られた。

以上のことから、ワイガヤ研修の効果について考えてみたい。報告者にとって、参加者との意見交換によって、自身の授業実践等に関する現状認識ができています。また、参加者として報告を聞くことにより、他の教員の教育ポリシーや学生の動向を把握することができています。

今回のインタビューの中で、ワイガヤ研修への課題として、発表者の問題意識に基づいて報告が行われない場合は、共有しても得られるものが少ないという指摘があった。また、語学などの同分野の教員（非常勤講師も含む）によるワイガヤ研修実施の要望もあった。

4. まとめ

過去 2 年間実施してきたワイガヤ研修について、報告者へのインタビューを通して振り返った。ワイガヤ研修の目的である「立場の異なるメンバーによる自由な意見交換」を通して、自身の授業や教育における立ち位置の確認などが行われていることが把握できた。また、報告者

の授業実践における活動や経験を共有し様々な角度から議論することにより、報告者も含めて新たな授業手法の工夫と実践につながっているケースも見られた。その一方で、提供された話題の内容によっては、自由な議論を交わすという“ワイガヤ”状態に必ずしもなっていない側面があることも明らかとなった。

今回はこれまでの報告者に対するインタビューを中心とした現状把握となったが、来年度は継続的なカリキュラム・アセスメントのほかに、105分授業への移行などの全学的に優先される課題がある。今後はこうした課題にかかわる意見やニーズの聞きとりを行って、非常勤職も含む機構構成員の報告、そして報告者と参加者の双方が新たな気づきを得る知的刺激のあるFD研修を実施していきたいと考えている。

謝辞

本稿の執筆に当たり、これまでワイガヤ研修にご登壇いただいた基盤教育機構の教員の皆様には、お忙しい中快くインタビューに応じていただいた。梅村修機構長にはワイガヤ研修の運営および本稿へのご助言・ご校閲をいただいた。前FD委員の池田輝政先生には、本稿へのご助言・ご校閲をいただいた。この場をお借りして、ご協力をいただいた皆様に感謝申し上げたい。

2019 年 3 月 12 日

(2018年度) 第六回基盤教育機構 FD「ワイギャ研修」議事録

作成者 FD 委員 池田輝政

実施日・実施時間：2019 年 2 月 28 日 機構会議終了後 1 時間

参加者（敬称略）：梅村、東田、武田、水藤、田上、承志、清水、山口、池田

話題提供者：李 慶国 教授

1 はじめに

李慶国教授からは、国際教養学部旧アジア学科の中国関係教員で開発してきた「中国語文化演習」・「中国語現地演習」についての実践報告があった。

2 発表内容

(1) 「中国語文化演習」・「中国語現地演習」の科目の特徴

「中国語文化演習」は通年 4 単位、「中国語現地演習」はフィールド集中 4 単位（夏休み、南京大学）として運営。この 8 単位科目のセットは、2007 年、文学部から国際教養学部への改組に伴って開設された。

(2) 内容・方法の工夫（2018 年の事例）：

①「中国語文化演習」（春、承志担当）は、中国語のごく初歩的な会話ができるようにする。方法としては、中国の生活で常用するフレーズを理解し、繰り返し発音し、暗誦し、実際に使用できるようにする。

②「中国語文化演習」（秋、李慶国担当）は、南京での「中国語現地演習」で身につけた会話力、表現力を定着・保持・発展させる。方法としては、教室では原則として中国語のみを使用。学生が現地出会った様々な場面を思い出し、自分で会話を再現・展開し、ロールプレイングによって定着をはかる。さらに、現地経験をテーマとするプレゼンテーションを中国語で行う。最後にレポートを中国語・日本語の二言語で提出し、『アジア観光年報』に掲載する。

③「中国語現地演習」は、アジアをフィールドとして 2008 年からずっと中国関係教員で運営してきた。2018 年は南京大学で受入れてもらい、参加学生 10 名は 29 日間にわたり、南京の歴史・文化についての現地授業、会話力向上に対する現地 TA からの支援、自らの調査・研究テーマを探すための現地訪問、宿題の会話記録・生活記録の作成、中間発表・反省会などを経験した。引率は承志・李慶国の 2 名が分担。

(3) 8 単位授業で設定した達成目標

- ①体験と現地演習で異文化を肌で感じ理解する
- ②比較対象によって日本の良さなどを客観視できる
- ③異文化の長所を取り入れることができる
- ④中国語のコミュニケーションの実戦力を上げる
- ⑤研究テーマの設定、現地調査（資料収集、アンケート実施など）、レジュメ・レポート作成、プレゼンテーション、中国語ソフト活用、会話練習など総合的な学習ができる

3 結び

今回のお話では、実戦的な語学を学ぶ目的と方法についての事例を学ばせてもらった。具体的には、外国語スキルを初歩から実戦力まで引き上げるには、適切なクラス規模、最低限必要な時間量（1 年間で 8 単位）の確保、準備学修・フィールド演習・まとめ学修・レポート執筆という一連の総合的な学び、関係教員の協働による指導体制、その背後にある海外ネットワークの開拓と保持、などが視野に入ってきた。ここから考えさせられたことは、カリキュラムとして私たちが誠実に議論すべき課題があるという点であった。例えば、教室のみの語学科目の到達目標とは何か、聴く・読む・話す・書くの 4 技能の学びはどのようにすれば可能なのか、が頭に浮かんだ。

提供資料：

- (1) 発表レジュメ 1 枚
- (2) 学生 6 名の現地演習記録事例（中国語会話記録と日本語活動記録で構成）
- (3) 南京現地演習の記録写真（『アジア観光年報』第 19 号からのコピー）
- (4) 学生 2 名の『アジア観光年報』掲載レポート事例

2019 年 7 月 9 日

第 1 回基盤教育機構 FD「ワイガヤ研修」(議事録)

作成者 FD 委員 清水栄子

実施日：2019 年 6 月 20 日（木）機構会議終了後 1 時間

場所：総持寺キャンパス WIL Studio

参加者：伊藤、梅村、水藤、Thornton、武田、田上、東田、日比、松家、蛭原、吉田、清水

話題提供者：三上哲也氏（三菱地所第 4 設計部）

1 はじめに

第 1 回は、三上氏（三菱地所第 4 設計部）により、総持寺キャンパス WIL studio の設計意図、什器の選定理由等について、紹介いただいた。質疑応答の後、3 グループに分かれて、WIL Studio の有効的な活用について協議、全体共有を行った。

2. 内容

(1) 三上氏からの説明

- ・設計のコンセプト：1 階はポスター発表、多言語学習、ICT 機材の配備等により、学生の発表（グループワーク）および教員との共有スペースを想定して設計
- ・WIL Hall と WIL Studio：中間領域の仕掛けにより、「適度に見る・見られる」の関係、適度に音が聞こえる環境をつくりだし、集中・創造を高めることを狙った
- ・WIL Studio の家具：
 - ✓大型タブレット、ステージはどこでも活用できるように可動式を導入
 - ✓ブックシェルフカウンター：学生が立ち寄りやすい高さ約 1 m のカウンターとし、下部は本棚・収納とし、グループワークの道具や本を収納可能とした。学生が教材を見に来ることを可能とすることを狙いとしている
- ・リラックスさせる仕掛けとして吹抜け空間

(2) グループワークでの主な論点

- ・現状の共有と課題の洗い出し
 - ・学生にスタジオ内のプログラム内容の周知方法
 - ・教員および学生の利用者の増加のための方策
 - ・利用目的の明確化
- (各グループの検討結果は【資料】のとおり)

3. おわりに

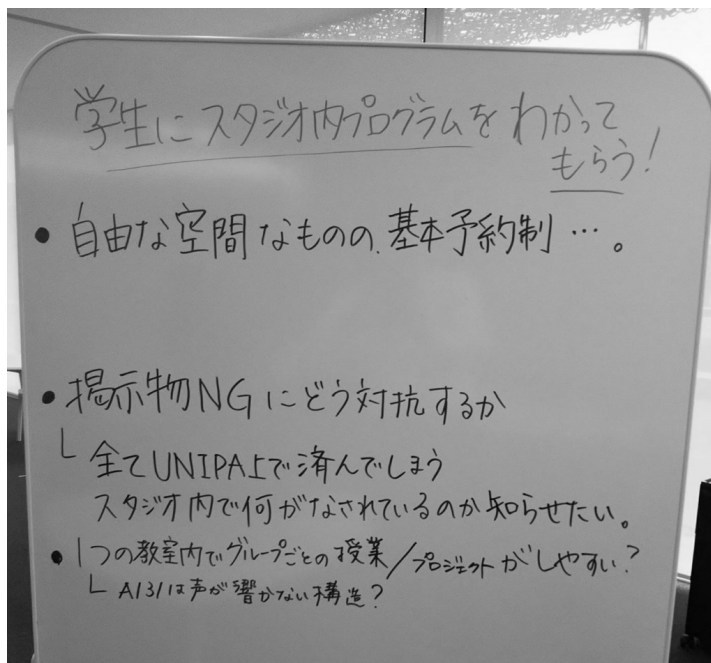
今回のワイガヤ研修は、総持寺キャンパスの Communication Studio で実施され、このスペースの設計意図の理解とそれをふまえた上での有効活用について意見交換を行った。現状認識と課題の共有ができたことが今回のワイガヤ研修の成果だと考える。総持寺キャンパスの有効活用については、必要や要望に応じて、ワイガヤ研修で継続して取り上げていくこととしたい。

【資料】

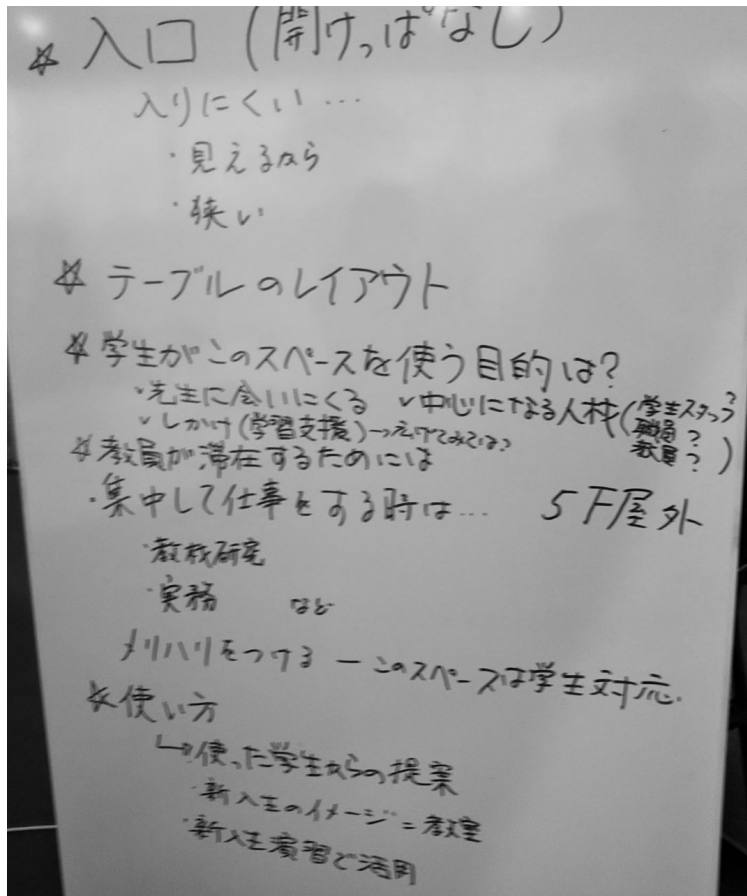
グループ A

- ・ 入りにくい（高級ブティックのよう）
オープンすぎる。（死角が必要）
パーテーション（で区切ってもいいのでは）
- ・ 認知度が低い
看板が立てられない・・・ 中から WIL ホールに向かってデジタルサイネージで告知
自習室として認知されていない（飲食制限で使いづらい？）
- ・ 利用主体は誰か
教員のイベントをこれ以上増やすのは困難
語学などの上級クラスの講座を、学生有志を集めて行うことは可能か（多人数になったら教室で）
- ・ 授業との連携を図る・・・ グループワークの宿題を課し、スタジオの利用を推奨
ある程度時間も指定し、担当教員他が待機し、指導環境を整える
- ・ 学生の自主的な活動の場とするなら、統制可能な組織化された学生団体に貸し出す

グループ B



グループ C



2019 年 7 月 21 日

第 2 回基盤教育機構 FD「ワイガヤ研修」(議事録)

作成者 FD 委員 清水栄子

実施日：2019 年 7 月 18 日（木）機構会議終了後 1 時間

参加者（敬称略）：梅村・大串・大島・水藤・Thornton、武田・田上・中井・中村・東田・蛭原・清水

話題提供者：松家裕子教授

1. はじめに

第 2 回の松家教授から話題提供として、追手門学院大学における中国語教育に関して、カリキュラムおよび海外研修に関する変化とともに、中国語教育における成果と今後の可能性について報告が行われた。

2. 発表内容

追手門学院大学の中国語教育

(1) カリキュラム

2017 年度に実施されたカリキュラム改訂以前 (2020 年度) までの基盤教育科目およびアジア (←国際日本) 学科における開講科目数や海外研修に関する大幅な変化が起こっている。また、カリキュラム (履修設定) の関係で、1 年春学期に中国語科目の履修ができず、秋学期に順次中国語 I、II の受講可能という状況であり、履修機会の提供が狭められている。

(2) 南京研修 (南京大学における 1 カ月の中国語研修)

これまでは、学科科目 (8 単位認定)、授業料等の大学負担が実施されていたが、2019 年度以降は認定科目 (2 単位)、大学負担の減額。中国語科目を通じて呼びかけるが、応募者が減少 (今年度は不催行)。

(3) 中国語教育の成果と今後の可能性

2018 年度の松家担当ゼミでは、半数の学生が南京研修参加者であり、中国語と研究の両方に積極的に取り組み、活かせる中国語の習得ができています。2019 年度の松家担当ゼミ (3 年・4 年) については、南京研修経験者 5 名。ネイティブスピーカー 5 名。また、逆に、大学内での授業では、発音・会話など実践練習の場で、中国語を母語とする留学生が活躍している。よって、「留学」は、本学中国語教育が困難な状況を乗り越える重要なキーワードとなるだろう。

3. おわりに

今回の松家先生のご報告から、授業および留学機会の重要性について改めて考える機会となった。授業実践において、留学生や先生ご自身が撮影された写真活用などによって、語学および文化を身近に学ぶ環境を提供するとともに、学生の興味・関心を高める工夫がされていると感じた。また、ゼミ指導などにおいて、学生の本質 (指向性・興味) を見抜いて、その学生に見合った卒論テーマを薦めるなど、より細やかな指導・支援が行われている。このような授業・指導とともに、学生自身が実際に経験する留学経験は貴重と考える。

付録：

表 追手門学院大学における中国語教育の変化

		2018 年度以前		2019 年度以降	
		科目名	クラス数	科目名	クラス数
基盤教育科目	外国語	中国語講読入門 1	7	中国語 1	6
		中国語講読入門 2	7	中国語 2	6
		中国語講読基礎 1	2		
		中国語講読基礎 2	2		
		中国語講読基礎 3	2		
		中国語講読基礎 4	2		
		中国語会話入門 1	9		
		中国語会話入門 2	9		
		中国語会話基礎 1	4		
		中国語会話基礎 2	4		
		中国語講読中級 1	1		
		中国語講読中級 2	1		
		中国語会話中級 1	1		
		中国語会話中級 2	1		
	演習			言語文化演習（中国語）	1
	基本科目			ことばと文化（中国語圏）	1
アジア学科 （国際日本学科）	学科科目	専修中国語初級講読 1	3		
		専修中国語初級講読 2	3		
		専修中国語初級講読 3	3		
		専修中国語初級講読 4	3		
		専修中国語初級会話 1	3		
		専修中国語初級会話 2	3		
		専修中国語中級講読 1	3		
		専修中国語中級講読 1	3		
		専修中国語中級会話 1	3		
		専修中国語中級会話 2	3		
		専修中国語中級作文 1	3		

		専修中国語中級作文 2	3		
		専修総合中国語 1	1		
		専修総合中国語 2	1		
		専修中国語上級会話 1	1		
		専修中国語上級会話 2	1		
		中国語現地演習	1		
		中国語文化演習	1		

説明：

この表は、2018 年 3 月をもって国際教養学部アジア学科が実質廃止されたこと、および 2019 年 4 月から基盤教育科目の新しいカリキュラムが始まったこと、のふたつによって生じた、追手門学院大学における中国語教育の変化を、開設科目とそのクラス数によって示したものである。現在を含む移行期には、新旧カリキュラムの科目が、それぞれクラス数を減じながら両方開講されている。ここに示したクラス数は、そうした例外的な状況を度外視して、それぞれのカリキュラムが単独で、フルに実行された場合の数である。

この変更は、もとより現場からの意見によるものではない。われわれ中国語を担当する専任教員は、変更ができるだけ小さくなるようお願い、またそのためにできる努力もしてきたが、実らなかった。

FD 研修で期待されているのは、授業の中身についての話であるが、今回、あえてこの変化を話題の中心とした。FD 研修の目的がよりよい教育にあるとすれば、現在の追手門学院大学における中国語について、この問題を避けてとおることはできない。じっさい、この変化は、授業の中身にも大きな影響を与えている。また、こうした変化が起こっている、あるいは起こったことを、より多くの先生方に知らせ、さらには、記録に残しておく必要もあると考えた。

2019 年度秋学期から開設された「言語文化演習（中国語）」は、定員 30 名にたいし 150 名の履修希望者が集まった。中国語を学びたい学生は多くいる。このことを特に記しておきたい。

（松家裕子記）

2020 年 1 月 14 日

第 3 回基盤教育機構 FD「ワイガヤ研修」(議事録)

作成者 FD 委員 清水栄子

実施日：2019 年 10 月 24 日(木) 機構会議終了後 50 分

参加者(敬称略)：梅村、大島、Thornton、水藤、田上、武田、中井、中村、東田、松家、李

話題提供者：大串恵太常勤講師

1. はじめに

第 3 回は、大串常勤講師から「The Question Formulation Technique (立問技法)」について話題提供いただいた。

2. 発表内容

The Question Formulation Technique : QFT (立問技法) は、ダン・ロスステイン、ルース・サンタナによる指導法である。冒頭、「たった一つを変えるだけ〜クラスも教師も自立する「質問づくり」〜」(新評論 2015) の紹介がなされた。そののち、3〜5 名のグループに分かれ、大串先生の進行のもと、問いを作成するワークを行った。

○問いづくりのルールとして、以下の 4 点が提示された

- ・できるだけたくさんの問いを出す。(記録係も問いを作る)
- ・話し合ったり、評価したり、答えを言ったりしない。
- ・発言の通りに問いを書き出す。
- ・肯定文として出された意見や主張は疑問文に転換する。

○ワークのプロセスは以下のとおりである

1. 自分たちの問いをつくり出す
2. 「閉じた質問」を「開いた質問」に、「開いた質問」を「閉じた質問」に変換する
3. 問いに優先順位をつける

○ワークから学んだこと

1. 問いをどのように使うか考える
2. 何をどのように学んだか振り返る

○QFT で鍛えられる思考力

発散思考、収束思考、メタ認知

3. おわりに

今回は、グループワークなどを通して、実際に QFT を経験した。大学入学後、学生はレポート作成等の様々な場面で、自ら問い立て、それに答えることが求められる。しかし、これまでの学校教育においては、問いに答えることを中心に学習してきており、戸惑いを感じる学生は少なくない。教員が実際に問いを立て、その問いを全体で共有し、立てた問いの使われ方や学びについて共有する過程の中で、学生目線に立つことができたと考えられる。これらのワークでの経験が、今後の授業において、学生目線に立った教育手法の選択のヒントとなったと考える。

2019年12月7日

第4回基盤教育機構FD「ワイガヤ研修」(議事録)

作成者 FD委員 清水栄子

実施日：2019年11月14日(木) 機構会議終了後50分

参加者(敬称略)：伊藤、梅村、大島、Thornton、水藤、田上、武田、デイヴィス、中井、中村、東田、松家、蛭原、清水

話題提供者：田上正範准教授・Thornton Katherine 准教授

1. はじめに

第4回は、WIL Studio(総持寺キャンパス)の活用に関して春学期の振り返りと今後について、話題提供いただいた。

2. 発表内容

WIL スタジオの春学期の活用

(1) 建設設計コンセプトからのヒント(田上准教授)

建設設計コンセプトからのヒントと代表的な実践事例について紹介。設計コンセプトから、学びへの出会いについてデパートでのショッピングをイメージして、「①なんとなく見る」「②気になる」「③目的をもって入り込む」という3段階で説明。具体的な実践事例として、ホームカミングデー、学生企画、英語プレゼン、新入生演習について紹介された。

(2) Global Studio への E-CO システムのトランスファー(Thornton 准教授)

E-CO の概要を説明後、総持寺キャンパスでの春学期の活動と課題について発表。E-CO は、ソーシャルラーニングスペースと自己学習センターとして自律的学習者の育成を目的とする。留学や海外に興味を持つ学生、英語・多言語を学ぶ学生などにコミュニティとしての場を提供している。総持寺キャンパスにおいても、教材の貸し出し、会話セッション(予約制)、ピアサポートなどの入り口を提供している。スペースの違いや学生スタッフ、管理の難しさなどが課題である。

(3) 利用を促進するための提案

- ・実践のポイントとして、経験を伝える(ケーススタディ・ケースメソッド)、10~30分のモジュールを繰り返す授業デザイン、スモールステップによるクラス(15回)設計とともに、「創造的人間(湯川秀樹)」を引用して、教育に関しての哲学を紹介(田上准教授)
- ・E-COからの提案として、利用するきっかけを作ること、様々な入り口を提供すること、交流を促進するスペースデザイン、歓迎するスタッフによって"Community of Practice"が生まれる(Thornton 准教授)

3. おわりに

総持寺キャンパスのWIL Studioの活用について授業実践も含め、具体的に情報提供をいただき、参加者間でその活用について考えるよい機会となった。全体協議では、自由に使用できることを知らない学生もいるので、授業で活用するなどの具体的な課題解決策についても提案があった。短時間での開催であったが、実践についての情報共有と今後の活用に関するよい意見交換の場になったと考えている。

2019 年 12 月 21 日

第 5 回基盤教育機構 FD「ワイガヤ研修」(議事録)

作成者 FD 委員 清水栄子

実施日：2019 年 12 月 19 日 (木) 機構会議終了後 50 分

参加者 (敬称略)：伊藤、梅村、大島、Thornton、水藤、田上、武田、中井、中村、東田、松家、蛸原、清水

話題提供者：伊藤文男教授

1. はじめに

第 5 回は、伊藤教授から、キャリア開発センターの業務についてインターンシップを中心に紹介をいただいた。

2. 発表内容

キャリア開発センターについて

(1) 業務についての説明 (規程)

まず、キャリア開発センターの業務およびスタッフ体制、業務場所について紹介された。業務に関しては、規程をもとに説明された。

(2) 具体的な業務内容

具体的な業務内容について、特にインターンシップを中心に説明された。インターンシップは、春学期と秋学期の 2 回実施される。関連してガイダンス (8~10 回/年)、マッチング面談 (全員)、事前指導 (5 コマ相当)、事前個別指導 (ほぼ全員)、直前指導 (2 コマ相当、2~4 回程度/年)、事後研修 (5 コマ相当、8~10 回/年) が行われている。トラブル対応や実習ノートの確認・管理、事後報告会・交流会等も企画・運営されている。海外インターンシップも実施している。このほかに WIL 推進プロジェクト会議運営、正課科目、SPI 対策指導、英語力アップ指導なども担当。

3. おわりに

キャリア開発センター業務のうち、特にインターンシップについて紹介いただいた。学生たちを送り出す前、期間中、その後にわたり、包括的な指導・サポートが実施されていることが理解できた。具体的な事例を挙げて紹介いただいたので、容易にイメージすることができた。また、WIL 推進プロジェクトについても、大学教育研究評議会資料等に基づき、今後の展開について実施プログラム等を提示いただいたため、理解が深まり、基盤教育との連関についても、授業担当者としてイメージできたのではないかと感じている。